

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 2 年 6 月 30 日現在

機関番号：32612  
 研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）  
 研究期間：2017～2019  
 課題番号：16KK0050  
 研究課題名（和文）ドイツのアラブ系移民／難民の移動と受け入れに関する学際的研究（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Interdisciplinary study of the migration and policy concerning Arab migrants-refugees in Germany (Fostering Joint International Research)

研究代表者  
 錦田 愛子（NISHIKIDA, Aiko）  
 慶應義塾大学・法学部（三田）・准教授

研究者番号：70451979

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 11,300,000円  
 渡航期間： 12ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、歴史的に中東から多くの人々を受け入れてきたドイツの移民／難民政策と、ドイツ在住のアラブ系移民／難民の移動・適応過程と意識、およびその相互作用について研究を行った。フンボルト大学移民統合研究所（BIM）所属の研究者との連携の下で、2018年度に一年間の在外調査研究を行い、ベルリンを中心とするドイツで、シリアやパレスチナ出身のアラブ系移民／難民に聞き取り調査を行った。またドイツ政府機関のとする政策の資料収集と、NGO活動への参与観察を通して、進む統合の過程と、官民の連携による受け入れの実態、残された問題を明らかにした。

### 研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はヨーロッパ諸国の難民受け入れ政策について、受け入れられる側である難民の側の視点から政策を評価し、その有効性や今後の課題を明らかにした点で、学術的な新しさが指摘される。中東研究者がアラビア語を使用して難民コミュニティへの長期参与観察と聞き取り調査を行い、彼らの移動と適応の過程、その各段階において直面した問題点を明らかにした質的研究は、世界的にも例が少ない。調査の分析結果は、欧州難民危機後の各国による政策立案にも貴重な参照点を提供するものである。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the interaction between German immigration policy and the process of adaptation of the Arab migrants-refugees in Germany. In collaboration with the researchers affiliated to BIM, Humboldt University in Berlin, one-year field research was conducted in 2018. Interviews with the Arab migrants-refugees from Syria or Palestine was conducted in Arabic. The governmental publications including the issues from the Federal Office for Migration and Refugees (BAMF) were collected. Base on the above mentioned data resources and the results of the participatory observation of several NGOs, proceeding integration, collaboration between those actors for integration, and the remaining problems are pointed out.

研究分野：中東地域研究

キーワード：アラブ系移民 ドイツ シリア難民 中東政治研究 難民研究 移民／難民

### 1. 研究開始当初の背景

報告者は本研究の開始以前に、ヨルダンおよびスウェーデンで調査を行い、アラブ系移民/難民の移動の動機と目的地の選定理由などについて一定程度、明らかにしていた。だがその研究を遂行していた時期に、2015年の欧州難民危機が起こり、大規模な難民の流れが主にドイツを目的地として移動を開始した。スウェーデンとドイツはともにこの時期の主要な受け入れ国ではあったが、特にドイツはEUの移民/難民政策において主導権を握る立場にもあったことから、ドイツ国内での受け入れをめぐる状況と政策についての理解が、中東からヨーロッパに向かう移民/難民の動向を捉える上で不可欠と考えた。

先行研究の中では、これまで欧州各国の移民政策の変化や、社会における受容や差別をめぐる問題については一定の研究蓄積がみられた。しかし受益者である移民/難民側からの評価を取り入れた研究は乏しかった。またドイツに関しては、歴史的に受け入れ人数の多いトルコ系移民に関する研究は多いものの、近年のアラブ系移民/難民の急増と、その受け入れをめぐる研究はほとんど見られなかった。本研究はこれらの点に着目し、中東研究者としての視点から、現地調査にもとづきアラブ系移民/難民の統合過程を明らかにするものである。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、ドイツにおける対移民/難民政策の変遷、ならびにドイツ在住のアラブ系を中心とした移民/難民の移動過程と意識について、その相互作用を含めて明らかにすることである。政策の点では特に、移民/難民に対する居住許可、および就労権の付与や、家族の呼び寄せに関する制度を中心にその変遷を整理し、近年の動向を位置づける。その上で、それらが人の実際の移動や意識の点でどのような影響を与えたのか、移動先の選択や、移動・定住に至る過程、現在の居住地での状況などについて事例研究を通して究明していく。ドイツの研究機関フンボルト大学(Humboldt-Universität)ベルリン移民統合研究所(BIM - Berliner Institut für empirische Integrations und Migrationsforschung)との国際共同研究により、ドイツ国内での研究蓄積を踏まえ、そこに中東研究のフィールド調査の知見を活かすことで、より総体的な難民の状況の分析を試みる。

### 3. 研究の方法

本研究の研究手法としては、まず先行研究と資料に基づき、ヨーロッパ諸国におけるアラブ系を中心とした移民/難民の移動と受け入れ状況を俯瞰し、その中でドイツの位置づけを再確認する。次に、ドイツの移民/難民受入政策の推移と、社会における統合をめぐる問題について、ドイツ政治の文脈から理解を試みる。これらを踏まえたうえで、ドイツ在住のアラブ系移民/難民に対して聞き取り調査をアラビア語で行ない、ドイツへの移動時期や経路、現在の法的地位、就業状況、生活上の問題や満足度などについて調査を進める。こうした既存の研究資料調査と独自の事例研究により、本研究はドイツ国家と社会に対してアラブ系移民/難民の急増が与えた影響を明らかにし、ドイツの歴史と制度の中で受け入れの現状について捉えることができる。

### 4. 研究成果

報告者は2018年4月より一年間、ドイツの首都ベルリンのフンボルト大学移民統合研究所(BIM)に客員研究員として所属し、研究を行なった。ベルリンを中心にドイツ国内在住のアラブ系移民/難民を対象とし、彼らの移動の過程と、その適応をめぐる課題などについて聞き取り調査を行った。またドイツの対移民・難民政策について、特に2015年の難民危機以後の変化に着目しながらその変遷について調べ、分析を進めた。ドイツにおける移民/難民受入政策の変遷とその影響については、フンボルト大学ベルリン移民統合研究所の研究員 Sina Arnold 氏(2018年半ば以降は他の研究所へ異動)、Tim Müller 氏ほか、同研究所に所属する研究者らとともに共同研究を進めた。またこれらの研究テーマに関連して、ベルリン自由大学や、ゲッティンゲン大学マックス・プランク研究所など、ドイツ国内の研究機関に所属する隣接分野の研究者と研究交流を行った。調査と並行しながら、分析結果については国際学会での発表や、論文執筆を進めた。下記では各年度の研究成果を、企画や報告ごとに詳述している。

研究の内容面では、本国際共同研究により、ドイツ国内での移民/難民研究の蓄積に、中東研究者としての報告者の知見を活かした調査データを加え、アラブ系移民/難民をめぐる受け入れ政策の効果について新たな評価材料を提供することができた。トルコ系が中心であったドイツにおいて、近年急増したアラブ系移民/難民によってもたらされた移民社会の様相の変化を、質的研究として提示し国際的に共有している。また報告者にとっては、従来の中東を中心としたフィールド調査のみならず、ヨーロッパ諸国における移民/難民受入れの歴史や政策にまで視野を広げることで、現代の人の移動を長期的な枠組みの中に位置づけ、多面的でより深い理解に向けて研究を発展させることができた。さらに当初想定した以上の発見として、移民/難民対策における、ドイツでの公的機関と市民社会の活動の連携についても見出すことができた。

#### (1) 初年度の研究成果

初年度は交付申請をした2017年11月以降、ドイツでの長期在外研究の準備と研究交流を進

めた。2018年4月以降の受け入れ予定先のベルリン移民統合研究所(BIM)から共同研究者のSina Arnold氏を招へいし、2018年1月末から2月にかけて東京で2回の国際ワークショップを開催した。第一回目は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・中東イスラーム研究拠点の人間文化研究機構「現代中東地域研究」事業との共催で、“Jews and the Center/Margin of the Contemporary Society”というテーマを設定し、ドイツにおける反セム主義と移民/難民の関係について報告を頂いた。第二回目は基課題である科研費基盤(B)「中東・ヨーロッパ諸国間の国際政策協調と移民/難民の移動に関する研究」(課題番号:17H04504)との共催で、“Germany as a “postmigrant” society: Contemporary Challenges and Controversies”というテーマでドイツにおける移民/難民受入れの現状と課題について報告を頂いた。それぞれ他研究プロジェクトと共催にしたことで、日本の多分野の研究者との交流が可能となり、研究ネットワークをより広く構築することが可能となった。また3月にはマルタ島を起点に地中海を渡る移民/難民の報道を続けてきた写真家Darrin Zammit-Lupi氏を招へいし、ドイツを含めEU諸国へ移動する移民/難民の移動過程について話を伺った。

当初の計画では2017年度は、研究代表者が個人で次年度の渡航に向けた準備のみを行うことを予定していた。だが、2017年8月に基課題で行ったドイツでの短期調査で、国際共同研究の相手方であるフンボルト大学移民統合研究所(BIM)との調整が進み、年度内の日本への招聘と研究交流企画を計画し、実施することができた。国際ワークショップを開催することで、ドイツでのフィールド調査に備えて、詳細な情報交換を行うことができ、また日本の関連分野の研究者との間で、国際研究交流と研究ネットワークの構築を進めることができた。マルタからの招聘は当初の計画にはなかったが、隣接分野の研究者との協力のもと、本研究課題および研究代表者の所属機関との共催により実現した。招聘者は研究者ではなく実務家だが、本研究課題と密接に関連するテーマを長年追ってきた経験の蓄積をもち、移民/難民の移動過程の様子について、詳細な知識を得ることができた。

## (2) 二年目の研究成果

二年目は、本研究計画の中心となるフィールド調査として、2018年4月1日から2019年3月26日まで約1年間、ベルリンのフンボルト大学移民統合研究所(BIM)を受け入れ機関として長期在外研究を行った。調査期間中はベルリン市内をはじめとするドイツ国内各地で、シリア系・パレスチナ系を中心としたアラブ系移民/難民への聞き取り調査を行い、支援NGOの活動などで参与観察を行った。アラブ系をはじめアフガニスタンやイランなどから来た移民/難民の集まる抗議集会や、教会での集まり等に参加し、アラビア語を中心に、英語やドイツ語を補助的に用いて聞き取り調査を実施した。

BIMでは調査環境の整備に際して協力を得たほか、月例研究会に参加して研究員との意見交換を定期的に行った。また2018年9月にはBIMを会場に、BIM側の研究員2名と、日本から招聘した関連分野の研究者3名を報告者として、“Dynamics of Refugees and Perception toward their Integration”というタイトルでワークショップを開催した。

調査期間中にはベルリンを拠点として、近隣の都市においても調査および研究交流を行った。調査ではベルリンとの比較対象として、ドイツ西部にあるデュッセルドルフ市近郊のノルトライン＝ヴェストファーレン州のヴッパータール市内や、ドイツ東部にあるブランデンブルク州のコツブス市内でも聞き取り調査を実施した。資料調査はベルリン市内の国立図書館およびフンボルト大学附属図書館にて主に行ったが、必要に応じてロンドンのSOAS(アジア・アフリカ研究学院)やレバノンのバイルートでも資料収集を行った。ロンドンではSOASとRAI(英国王立人類学協会)が共催の国際会議に参加したほか、ゲッティンゲン大学マックス・プランク研究所で開催された国際ワークショップに出席し、参加した研究者との間で研究テーマに関連した学術交流を行った。

当初の計画では、ベルリン市内での調査のみを予定していたが、研究の過程において、ドイツ国内の地域的多様性を調査に反映する必要があることが分かった。そのため、ベルリン以外のドイツ西部および東部においても短期調査を計画し、実施することができた。これらは調査結果の分析において、地理的属性の与える影響を考慮するうえで重要な参照点となった。受け入れ機関であるBIMでは、所長・副所長を含めて、主要な研究員の多くと交流をもち、今後の研究協力の礎を築くことができた。本研究課題がBIMとの連携で実施した9月の国際ワークショップは、BIMがこれまで受け入れてきた外来研究員としては初めて、外来研究員が主催で実施した研究企画であったとして、BIM側から高い評価を受けた。またゲッティンゲンおよびロンドンで開催された国際会議への参加では、ベルリン以外に拠点を置く研究者との間で交流をもつことができた。研究成果の一部は、4月にベルファストで開催された国際学会(ESSHC:ヨーロッパ社会科学歴史学会)や、11月に一橋大学で開催された国際シンポジウム、同じく11月に大宮で開催された国際政治学会の部会報告などで口頭発表を行った。

## (3) 三年目の研究成果

本研究課題は当初、2018年度で終了の予定であったが、国際共同研究が期待以上に発展したため、年度を延長して実施することにした。前年度の長期在外研究期間に構築された研究協力体制を発展拡大するため、ドイツでの所属先であったフンボルト大学移民統合研究所(BIM)から若手研究者を、日本国内で開催した国際ワークショップおよび学会での報告者として招聘し

た。また日本国内での国際ワークショップの開催、移民当事者や支援活動側からの認識についての理解を深めるため、ドイツからのシリア難民と NGO 関係者の招聘事業を行った。

フンボルト大学からは BIM の研究員 Tim Müller 氏を招聘し、10 月 19 日に日本国際政治学会トランスナショナル分科会にて、他の 2 名の日本人報告者と共に「計量分析から見る移民 / 難民の移動」というタイトルのパネルでご報告頂いた。また 10 月 23 日には東京大学駒場キャンパスにて国際ワークショップを開催し、ご報告頂いた。BIM とは研究連携を図りながら、今後の研究協力の可能性を模索していく予定である。

さらに昨今のドイツにおける移民 / 難民受け入れをめぐる状況について報告して頂くため、10 月末にはベルリン市内でのシリア難民調査の過程での協力機関であったローカルな難民支援 NGO の「BBZ」からスタッフ 1 名と、受益者であるシリア難民 1 名を招聘した。10 月 30 日に京都大学で、11 月 2 日には東京大学伊藤国際学術研究センターで講演頂いた。こちらは東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・中東イスラーム研究拠点と共催であり、国内の研究機関とも連携した意義深い研究交流事業となった。

これらと並行して、2019 年 8 月には企画の準備および補足データの収集のため、ドイツでの短期追加調査も行った。また研究成果を国際的に発信するために、学会発表やパネルの企画を行った。6 月には東京大学で開催されたスラブ・ユーラシア研究東アジア大会で、ドイツの受け入れ政策における官民の連携について報告を行なった。9 月にはアルメニアの首都エレバンで、ベルリン滞在中に知り合った国立科学アカデミーの研究員と共催で、シリア難民に関する国際ワークショップを開催した。ワークショップには研究者だけでなく、アルメニアの関係省庁からの出席者もあり、研究の成果を広く共有することができた。また 10 月にはトルコのガジアンテップ大学が主催で開催されたシリア難民国際会議に出席・報告し、設立されたばかりの難民研究センター所長らと研究交流を深めることができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 錦田愛子	4. 巻 2018年5月号
2. 論文標題 「離散から70年 パレスチナ難民の帰還をめぐる思い」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『現代思想』 特集=パレスチナ イスラエル問題	6. 最初と最後の頁 180-189
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 錦田愛子	4. 巻 -
2. 論文標題 「パレスチナ人58人が死亡したガザでの衝突をハマースの責任に転嫁するアメリカ」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ニューズウィーク日本版, 2018年5月17日	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2018/05/58-1.php">https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2018/05/58-1.php</a>	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 錦田愛子	4. 巻 6号
2. 論文標題 「なぜ中東から移民 / 難民が生まれるのか シリア・イラク・パレスチナ難民をめぐる移動の変容と意識」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『移民・ディアスポラ研究』	6. 最初と最後の頁 84-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 錦田愛子	4. 巻 -
2. 論文標題 「エルサレムをめぐるトランプ宣言の行方 意図せず招かれた中東の混乱」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ニューズウィーク日本版, 2017年12月10日	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 錦田愛子	4. 巻 -
2. 論文標題 「エルサレムでの衝突はどこまで広がるのか パレスチナ・イスラエルで高まる緊張」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ニューズウィーク日本版、2018年7月23日	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 Aiko Nishikida
2. 発表標題 "New Boundary of Japanese Migration Governance"
3. 学会等名 Turkish-Japanese Joint Research Workshop (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Aiko Nishikida
2. 発表標題 "Prolonged Conflict and Multidimensional: approach to the issue of Palestinian refugees"
3. 学会等名 International Conference "Relational Studies on Global Conflicts- Toward a New Approach to Contemporary Crises" (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 錦田愛子
2. 発表標題 「離散により乗り越える分断 パレスチナ人の再難民化と国民国家」
3. 学会等名 日本国際政治学会2018年度年次大会 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1 . 発表者名 Aiko Nishikida
2 . 発表標題 “ Living Strategy of Transnational Families: The Effect of the Border Control on Migration to the EU countries ”
3 . 学会等名 International Symposium “ Border/Boundary Control in the Age of Transnationalization: Comparing Experiences in North America, EU & Japan ” ( 招待講演 ) ( 国際学会 )
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Aiko Nishikida, Yutaka Takaoka, and Shingo Hamanaka
2 . 発表標題 "Comparative study of the dynamics of the Syrian refugees in Jordan, Turkey and Sweden"
3 . 学会等名 European Social Science History conference (ESSHC) Annual Conference 2018 ( 国際学会 )
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Aiko Nishikida
2 . 発表標題 “ Syrian refugees in Sweden Their struggle for adaptation. ”
3 . 学会等名 International Symposium ‘ The Global Refugee Crisis: Mobile people under state protection or exploitation ’ ( 国際学会 )
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Aiko Nishikida, Yutaka Takaoka and Shingo Hamanaka
2 . 発表標題 “ Syrian and Palestinian Diaspora: Their Experience and Consciousness of migration. ”
3 . 学会等名 The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES) Annual Conference 2017 ‘ Continuity and Change: Diaspora, Religion, Kinship, Food, Art and Architecture. ’ ( 国際学会 )
4 . 発表年 2017年

## 〔図書〕 計3件

1. 著者名 松原康介、錦田愛子他著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 400
3. 書名 『地中海を旅する62章 歴史と文化の都市探訪』	

1. 著者名 移民政策学会設立10周年記念論集刊行委員会編、錦田愛子・駒井 洋・柏崎千佳子・昔農英明・宮島 喬・柄谷利恵子・石井由香他著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 296
3. 書名 移民政策のフロンティア	

1. 著者名 石黒大岳編、錦田愛子・石黒大岳・村上拓哉・堀抜 功二・白谷望他著	4. 発行年 2017年
2. 出版社 アジア経済研究所	5. 総ページ数 172
3. 書名 アラブ君主制国家の存立基盤	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

<p>本研究で行った関連企画ならびに研究会のウェブサイト</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・マルタ報道写真家写真展「エクソダス - 地中海を渡る脱出 - 」 <a href="https://bit.ly/2r0ST1s">https://bit.ly/2r0ST1s</a></li> <li>・2017年度第6回 パレスチナ/イスラエル研究会 <a href="https://bit.ly/2DkgX0T">https://bit.ly/2DkgX0T</a></li> <li>・研究会 After the “Refugee Crisis” in Europe: The case of Germany <a href="https://bit.ly/2rMNOtt">https://bit.ly/2rMNOtt</a></li> </ul>
---



## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	ミュラー ティム  (Muller Tim)	フンボルト大学・ベルリン移民統合研究所・ジュニア・リサーチ・グループ・リーダー	